

住職という生き方

2500年の

信頼と実績、

伝統仏教でございませう。

仏縁を結ぶことで、

「心の保険」

が得られます。

リア住(リアル住職)だからこそ語れる、

“宗教的実用書”ここに登場!

蟬丸P

住職という生き方

蝉丸P

星海社

152



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

はじめまして、「リア住」(リアル住職)の蟬丸Pでございます。

自分は家族に関係者がいない一般家庭から出家得度とくとして、お坊さんの世界に入ったのですが、早いもので仏門に入って30年が経ちました。

神奈川で生まれ、精密機械の工場を経営している家で育った自分が、様々な縁に支えられながら、30年というそれなりの期間お坊さんをやっているわけですが、どうもここ最近、同級生や知人から親の葬式なんていう話を聞く機会が増えてまいりました。

「お葬式ってどうやったらいいの?」「どうやって対処すればいいの?」という相談がものすごく増えてきたんですね。

一般の方は普段、宗教のことを考えることははまさないわけですけど、やはり親は衰えていくわけです。もしくは突然、亡くなったりするかもしれません。

こうなると、否が応でも宗教にかかわることになります。「お葬式という現実」に巻きこまれるわけですね。

自分と同じ40代くらいの方々は、やはり年齢的に親のお葬式を意識せざるを得ない。そんなわけで、「お寺さんはどうしたらいいのか」とか、「どれくらいお布施を包むのか」とか、そういうような相談がとて増えてまいりました。

普段はまったく自分に縁がないというふうに思っている人も、人生の節目節目と言いますか、お葬式というものは社会で生きていく中では無関係ではいられないものなのです。お葬式という避けられないできごとが、自分の親の場合にも確実にやってくる。

しかし、実親が突然亡くなった場合、果たして人間は冷静な判断というものができるところでしょうか？ これはやはり、はつきり言って難しいのではないかと思うわけです。本のなかで詳しくお話しますが、人が一人亡くなると、非常にバタバタといたします。これはもう、否応なくそうなってしまうものです。

そうすると、基本的な知識や経験がない人は、往々にして正確な判断というものができず、自身や周囲の意にそわないお葬式になってしまうわけです。

つまり、普段のなにも問題のないときに知識を仕入れておくことや、自分が住んでいる地域のお寺にどんなお坊さんがいるかを知っていることが大切になってくるのです。

お寺やお坊さんは、なにか得体の知れない日常の外側にいる存在ではありません。みなさんの人生において必ずといっていいほど関わりがある、日常に結びついた存在なのです。とはいえ、「お坊さんって怖いんじゃないか」「話を聞きに行っても失礼にあたるんじゃないか」、というように必要以上に構えてしまうという人は少なくないと思います。

ですが、それで葬儀などの対応が遅れてしまえば本末転倒になってしまいます。本書では、みなさんの日常と地続きの存在であるお寺の住職が、どのような生活をしているのか、どうやって住職になったのか、「伝統仏教」という保険をかけておくことでどのようなメリットがあるのか、どうすればお寺や住職と「仏縁」が結べるのか……と言ったことについて語ってまいります。

それでは最後までごゆるりとお付き合いください。

第1章

住職って普段なにをやってるの？

15

檀家寺と信者寺 16

観光寺院と新規檀家 18

お寺にいることが檀家寺の仕事 19

緊急対応と結集寺院と 21

お坊さんは一日で帰れるところにはいかない 23

檀家総代ってどんな人？ 24

住職の生活 27

お寺の仕事と宗派の仕事 28

暇ではないが食えるわけでもない 30

住職はキャパオーバーになりがち 31

たいていの住職はブラック業務 32

坊主は丸儲け？ 34

税制度への誤解 35

「目に見えないコスト」 36

檀家さんに馴染むまでは10年 38

ネット檀家とリアル檀家 39

葬儀に関する「都市から目線」 40

手間の一元化 41

「宗教不要論」と冠婚葬祭 43

宗教は社会のOS 44

サラリーマン僧侶 45

「無縁仏」をどうするか 46

第2章

住職への道

57

檀家さんのなり方 48

ちゃんとすれば「疎遠フォルダ」には入らない 49

兼業住職の現実 51

お寺も神社も格差社会 54

「住職」を目指したキツカケ 58

嘶家と住職 59

横文字時代の「逆張り」 60

「ご相伴力」と社会性 61

仏門に入る決心 63

高野山高校へ 65

何をするにも師僧が必要 67

基本パターンとしての教育機関ルート 68

修行道場で教えや作法を身につける 69

師僧がいらないとはじまらない 70

蝉丸Pの出家コース 72

動機はレアなり方はスタンダード 73

住職への道とそのメリット 74

なぜ蝉丸Pは四国にいるのか 75

お寺でのアルバイト 76

入るお寺は慎重に決めるべし 78

かばん持ちとして津々浦々へ 79

北陸か四国か 80

継ぐのは誰か？ 81

お寺も格差社会 82

住職にもいろんなパターンがある 83

住職という在り方の魅力 85

業務委託的な立場としての役僧 86

住職と檀家さんとの距離感 88

「行」と社会性とのバランス 89

伝統仏教各宗派の違い 93

第3章

住職とお寺あれこれ

97

直葬ってどうなの？ 98

「儀礼」の重要性 99

檀家のコスパ 102

転ばぬ先の杖 104

「宗教」が選択肢に入らない現代人 105

「直葬」は積み重なった知恵の放棄 106

本当の「永代供養」とは？ 107

「永代供養」にも色々ある 109

なんとも不安な「永代供養」 110

個人識別のコスト 112

「永代供養」と「合祀墓」^{ごうしぼか} 113

お骨はあまり重要ではなかった 115

粉骨業者と遺骨への「畏れ」 117

都市部の骨壺が大きいワケ 118

仏教にとって骨は大切ものではない 119

「レア焼き」にされる遺体もある 120

江戸時代までの遺体観 121

とにかくアイコンが必要 123

「東京目線」の『葬式は、要らない』 124

「無縁社会」とお墓 125

なぜお寺が神社を管理してのか 127

葬儀のフロー 128

葬儀のオプション 130

葬儀の基本は3日間 132

四十九日のあとからが住職の仕事 133

第4章

仏教界の現在

137

いまの仏教界は歪んでいる？ 138

混乱の原因は明治初期 140

「太政官符」とその影響 142

「神仏判然令」と廃仏毀釈 143

「神道は宗教に非ず」 144

神社が被った甚大なダメージ 147

明治期の宗教政策とスピリチュアリズム 148

「霊」概念の変容 150

「心霊」は外来種 150

内側と外側を混ぜてはいけない 151

「ダーウインシヨック」と「神智学協会」 153

「魂のステージ」とニューエイジ思想 155

伝統仏教はどうやっていくべきか？ 159

初伝が奥義 161

カトリックにおける「歴史の直線性」 162

インドの「口伝文化」はガチ 163

変わるべきはプロモーション 164

使える技術は使ってナンボ 165

第5章

住職という生き方

167

まずは「宗教年鑑」から 168

無縁墓は無縁ではない 170

「家」制度とお墓 171

住職は経営者目線を持つべきか？ 173

お寺経営と「応病与薬」 175

能力適正とステ振りを見極めるべき 177

「長屋のご隠居」的な価値 178

水先案内人としての住職 179

自分の菩提寺は自分で選ぶ 181

おわりに 183

スペシャルサンクス 189

住職って普段なにをやってるの？

檀家寺と信者寺

住職の仕事について語る前に、まずはお寺の種類について説明しておきましょう。

いわゆるお寺にも実は種類がありまして、大きくは「檀家寺」と「信者寺」の2つに分けられます。

「檀家寺」というのは、檀家さんというサポーター的な存在に支えられているお寺のことです。檀家寺というのは会員制のスポーツクラブみたいなところがありまして、年会費を払ってお世話になるわけです。

年会費を払うことでお葬式や法事などをお寺に取り仕切ってもらう権利が発生いたします。スポーツクラブにたとえて言えば、トレーニングマシンの機器代を払うようなもので、何かあったときには年会費を払っているから供養をお願いできるようになります。

これが日本で一番多い形である「檀家寺」になります。みんなで力をあわせてお寺を存続させることによって、いざというときはお葬式をお願いできる。そういう仕組みになっているわけです。

では、「信者寺」というのはどういうものかといいますと、それとは別に年会費を取らないビジターオンリーで構成されてるようなお寺のことをいいます。

これは「檀家寺」と違って、信者の方には直接的にお寺に対する義務はありません。年会費を払うような形ではなく、御祈禱を受けたりお願いごとをした結果、それが叶ったから信者さんが継続的にお寺に来てくれるようなタイプのもんです。

また、このふたつとは別に、いわゆる「観光寺院」のようなものもありますが、実はそのほとんどが、あまり檀家さんを抱えておりません。そもそも檀家さんを取らないところもあれば、檀家さんが少ないからこそ観光寺院になるようなところもありますね。また一般的に観光寺院といわれるようなところは歴史的な名刹めいさつなど格式が高いとされてるところが多いという印象です

なので、新規の檀家さんを受け入れるような場所ではなく、どちらかという人を選ぶような、そういった場所だといえるでしょう。そのような経緯があるので、観光寺院というのは例外もありますがあまり檀家さんを抱えていないのです。

さらに、ここが少しややこしいのですが、観光寺院の中にも檀家寺タイプと信者寺タイプがあります。一般的なイメージとして「お参りするところ」が観光寺院だという印象があると思うのですが、檀家さんが多い上に拝観をやっているところもあれば、御祈禱がメインで拝観もやっているパターンもあるので一概にいけない部分もあります。

観光寺院と新規檀家

東大寺のような超有名な観光寺院は檀家さんの新規受け入れはしていません。東大寺の中に塔頭たっちゅう寺院という小さいお寺がありますが、そういったお寺に少数の檀家さんがいることはあるようです。

ですが、飛び込みの新規で檀家さんを受け付けるということは基本的にありません。長い年月をかけて積み重ねられてきた塔頭寺院と檀家さんとの仏縁があるわけですから、そこに新規で募集をかけてどつと檀家さんを入れるということはしないわけです。

有名な観光寺院で「檀家募集中！」のような看板をみかけないのは一見さんお断りに近いものがあつたりします。

お寺にいることが檀家寺の仕事

では次に、お寺の基本的な仕事をみていきましょう。ここでは自分が実際に就職を務めている檀家寺についてお話してまいります。

まず、檀家寺の就職に共通した仕事のひとつとして「お寺にいる」というものがあります。当たり前だと思われるかもしれませんが、これが実は非常に重要な仕事であり、また同時に大変なことでもあります。

就職に対して檀家さんが一番期待しているのは、お葬式のとくにちゃんと自分のお寺の住職が拝んでくれることです。身内が亡くなったときに住職に連絡したらいませんでした、ってことはできないわけです。そんなことをしてまえば、檀家さんからの信頼を失ってしまうことになります。

法事の場合ですと年末や年始くらいにはお知らせを出したりするわけですから、これは予定がたつわけです。

ただ、葬儀となればそうはいきません。基本的にはなにかあったらすぐに対応するために待機している必要がでてきます。ことほど左様に、住職というのはお寺にいる事自体に価値があるわけです。また逆をいえば、お寺にいなければその価値はなくなってしまうということになります。

また、法事やお葬式のほかに、檀家さんの相談を受けることも住職の仕事のひとつです。うちのお寺ですと、だいたい週に2〜3回くらい檀家さんが相談事をしにいらっしやいます。信者寺ではないので列をなして次から次に檀家さんが相談にくるということはありません。

相談内容としては茶飲み話や人間関係の愚痴、先祖代々の墓が多すぎるので1つにまとめたというもの、永代供養ってどうやったらいのかというような、お祀りごとに関するものまで様々です。

あるいは、住職さんのところに行けば色んなことを答えてくれるというような感じで、頻繁に来る人もいれば思い出したように来る人もおられます。そういう檀家さんがいるからこそ、檀家寺の住職はお寺に待機しておく必要があるわけです。

緊急対応と結集寺院と

とはいえ、住職も人間ですから買い物に行ったり少しのあいだ留守にすることもあります。自分は妻帯しておらず寺に一人なので、そういった場合はどうなるかといいますと、急ぎでなければ「前回きたら住職が居なかった」などチクリとやられるくらいですが、緊急の用件であれば檀家さんは必ず電話をしてくれます。いきなりお寺に来ることはほとんどなく、まずは電話がかかってくるのです。

うちのお寺の場合ですと、お寺の番号に電話すれば携帯電話に転送されますから、緊急の電話を取り逃がすということはほとんどありません。

そういう状況の中で自分がどうやって年末のコミックマーケットに行っているかといいますと、結集寺院という地域の同じ宗派で構成される互助組織に入っているのです、そこにお願ひしています。「院代」、つまりは職務を代行する者を立てるんです。

あとは、「法類寺院」。お寺同士の親類関係のようなものと言ったらいいですかね、法人

の役員なんかをお願いしたりされたりの間柄ですね。何かあった時には、法類さんがどうにか取り計らってくれるんです。

自分もイベントの際は結集寺院と連携しているわけですが、不思議なことに仕事が入ってイベントに行けなかったことはいままで一度たりともありません。自分はすっかり「間が悪いことはありませんように」とお祈りの時に念じているので、それが功を奏しているのかもしれないですね。おもしろいもので、仏さんが差別してくれているのでしょうか。

では、自分が遠出しているときに檀家さんが亡くなったらどうなるか。

これはまず、とにかく急いでお寺に戻るわけですが、着くまでのあいだは結集寺院の方はこちらから具体的な指示を出して動いてもらうことになります。大抵の場合は電話口で差別をしてしまいます。

日本では墓地・埋葬に関する法律で「亡くなってから24時間は火葬も埋葬もできない」という決まりがありますから1日かけて戻っても間に合いますので、猛烈に急いで帰らなければいけないというわけではありません。もちろん早く戻るに越したことはないわけですが……。

ですから、基本的には亡くなったその日のうちにお通夜ということはありません。どうしたって様々な手続きが必要ですし、葬儀屋さんにもお願いしないといけないわけですから、お通夜の時間に間に合えば大丈夫だといえます。

前日の深夜に檀家さんが亡くなって任職に電話するのが朝一で、そのままその日の夕方にはお通夜をお願いします。みたいないな場合もありますが。そういうときはお通夜に関しては結集寺院の方にお問い合わせをして、お通夜はどうしても間に合わないけれども葬儀には間に合うので何卒宜しくお願いいたします、という場合もあるわけです。

お坊さんは一日で帰れるところにはいかない

そのような事情がありますので、基本的に任職は一日で帰れる距離以上のところにはなかなか行けません。

これは実際に知り合いのお寺であったことですが、とある任職が檀家さんを連れてお釈迦様の仏跡を辿りに行くインド参拝ツアーをやったそうです。デリーの空港に着いた瞬間に檀家総代、しかも総代長さんが亡くなったって電話がかかってきたそうで……。その場

を副住職である息子さんに任せて慌ててお父さんはとんぼ返りしたそうです

普通の檀家さんであれば法類さんや結集寺院に頼んで、大変に申し訳ないのだけれど海外にいたのでお願いしますということはできないのではないのですが、総代長が亡くなっているわけですからそういうわけにもいきません。

そのようなことが実際に起こるわけですから、住職は一日以上かかる場所に旅行や用事で行くことは基本的にほとんどできないのです。

檀家総代ってどんな人？

では、ここで檀家総代について説明しておきましょう。檀家総代というのは大まかにいえば檀家さんの取りまとめをする人のことです。

たとえば、自分のお寺だと250軒ほど檀家さんがおりまして、大きく分けると集落ごとに10〜14地区くらいに分けられるのですが、昔は集落の面倒を見ていた人が檀家総代をやっていたようです。

要するに、お寺と檀家さんとの連絡役をしてくれる、地域の世話役だと考えれば分かり

やすいでしょう。こういう役割も都市部だと見なくなりましたが地方ではまだ健在といえます。

大体のお寺が檀家総代を総代会の役員として任命していきまして、会長・副会長は、さらに宗教法人の役員になってもらうことが大半です。お寺というのは宗教法人格を持つていますから、任職は代表役員に就くこととなります。また、それとは別に通常の役員もおかなければいけないので、お寺側の役員と檀家さんから選出した役員をおく形になります。宗教法人としての役員定数は基本的には奇数で、代表役員である任職を除いた半数が檀家総代から、過半数が先ほどの法類寺院から選出する形が多く、これは感情面でのこじれから任職の解任動議などが行われないうようにする寺側の自衛策でもあります

檀家総代、いわゆる総代会の構成は総代長・副総代長・会計の三本柱が基本的なスタイルです。この総代長、もしくは副総代長という役職は何かしらの選挙で決めるわけではなく、だいたいは地域の持ち回りになっていて、任期も決まっております。任期が終わりに近くなったらその総代さんが自分の後任を指名して頼むというのが通例になっていますね。

ただ、これも実はパターンが色々あります。

総代さんというのは宗派の規定として当該寺院の檀家であり、お寺の運営にあたって住職の補佐として実務的な部分を補い、お寺で行われることをみんなで協力して推し進めるための存在であると定義されているわけです。ですから必ず地域ごとに選出するという決まりがあるわけでもないのです、この辺は各寺院ごとに選出の方法は違います。住職がいわる一本釣りをして、特定の人をお願いするパターンもあります

この場合はいわゆる土地の名士であるとか、それなりに協力的な人をお願いすることになります。ちゃんと手伝ってくれる人でないと、檀家も困ってしまうし住職も困ってしまうので、どんな人が檀家総代につくのかということはお寺の運営にとって非常に大切なことだと言えます。

またお寺によっては檀家総代は寺院運営の意思決定機関として位置づけ、それとは別にお手伝いをする地域の「世話役」とか「輪番」とか「当家」——これは神社にもあります。が——お祀りごとやお知らせの配布、集金などを担う役割をお願いすることもあります。